
桃色の悪魔

CROW

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桃色の悪魔

【Nコード】

N4725BA

【作者名】

CROW

【あらすじ】

悪魔が棲む世界を治める王の側近つくもまこと九十九真の娘とづか桃香は優れた才能を持っていて父からも一目置かれていた。しかし彼女を陰で妬んでいた弟の翔しょうによって無実の罪を着せられ、捕まりかけたが、彼女の伯父の結樹ゆうきの手より助けられ、人間界へと送られる。

そして日本のとある高校に通う事になった。

第1話

とある場所にある悪魔が治める世界

王の城の5階の寝室

？「ふぁ、もう寝ようつと」

豪華なベッドで桃色のネグリジエを着た桃色のセミロングの少女が眠りに就こうとしていた。

？

男「寝たか、もうすぐ行くぞ」

そして別室でその様子を監視する者が居た。彼は彼女の弟だった。

寝室

男2「おい、起きろ桃香」

ツンツンした黒い髪の男が彼女を起こそうとしていた。

その少女の名は九十九桃香^{つくもとうか}で世界を治める王の側近九十九真（-まこと）の娘だった。

桃「結樹おじさん、どうしてこんなところに？まさか襲いに」

彼女はジト目で彼にそう言った。

結「違う、おいそんな目で見るな」

彼は伯父の九十九結樹（-ゆうき）で彼女によくちよっかいをかけてボコボコににされたりしていた。しかし不治の病でいつ死んでもおかしくなかった。彼女はそのことを知らない。

結「誰かがお前を貶めようとしてる」

彼は真剣な顔でそう言った。

桃「一体誰がそんなことを」

結「お前の弟翔^{うがし}だ、ずっとお前を妬んでいた」

才能に恵まれていた彼女は弟にずっと陰で嫉妬されていた。

突然ドーン！という音と共に黒い扉が吹き飛んだ。そして魔力で強化した弾を打つ銃を持った10人の黒いスーツを着た男達が来た。

男「九十九桃香！王の命により王暗殺を企てた罪で拘束する」

桃「私、そんなの知らない」

男「証拠がある」

結「行くぞ（持つかな俺）」

彼は彼女を布団から出し、お姫様抱っこして窓を突き破り蝙蝠みたいな羽を広げ飛んだ。

男「裏切り者め」

彼らも同じように羽を出し追いかけた。

？

男「糞、あいつ裏切ったな」

彼は裏切られた悔しさのあまり机を右手で強く叩いた。

そして2人はある場所に来た。地面には魔法陣が書いてあった。

結「チツもうすぐ奴らが来る（まだだ、まだ死ねるか）」

桃「これは」

結「お前は逃げる、行先は人間界だ、俺が使っていた家と資金も用意してある」

彼は翔に協力するふりをしながらずっと彼の事をずっと調べていた、そしてもしもの時に備え彼女を逃がす準備をしていた。

そして彼女を魔法陣の中に入れ何かを唱えた。その後すぐ魔法陣が光り出した。

男「まさか貴様」

そして彼らが一斉に銃を打った。

結「こいつだけは絶対に守る（頼む、もう少しだけ頑張ってくれ、あの笑顔を守るために）」

そして彼は全ての弾を魔法で止めた。

桃「伯父さん！？」

結「俺は不治の病だ、もう終わりだ、さようなら桃香、それと鍵だ」
そして家の鍵を渡すと彼の体が黒い靄になって消えた。それと同時に彼女は転送された。

第2話

日本のとある住宅街

彼女は彼が用意した2階建てのクリーム色の家の前に居た。深夜2時を過ぎていたので辺りは静まり返っていた。

桃「此処が人間界」

家の表札には「九十九」と書いてあった。庭は無く、塀は打ちっぱなしのコンクリートで出来ていた。

桃「これがカギね」

そして鍵を開けて中に入った。そして鍵を閉めた。

桃「意外と埃っぽくない」

部屋は和風と洋風が合わさっていた。結樹は魔法で綺麗な状態を保っていた。

そして居間は畳で6帖くらいの広さで20インチの薄型テレビがあつて半径が50センチの円形の脚の短いテーブルがあつた。あと、白いエアコンが付いていた。

桃「本？」

テーブルには黒くて厚さが2センチでA4サイズの本があつた。

桃「（何々、「人間界で暮らすにあたっての必要事項・日本編」）」
それには日本のことについて詳しく書いてあった。

桃「（さて、読もうか）」

彼女は本を読むスピードが速くなる眼鏡を掛けそれを読み始めた。

桃「（えつと通貨の単位は円で・・・・・・・・義務教育が9年・・・・）」

「

少女読書中・・・・・・・・

3時間後

桃「最後のページね」

最後のページには彼が書いた文章が載っていて貯金通帳が挟まっていた。

「桃香へ

これを読むときには多分俺は生きていないと思う・・・・・・・・今日家の近くの高等学校に編入する手続きを済ましてあるから明日からそこへ行ける、お前ならうまくやっていけるはずだ。後銀行の口座と居間のに俺が今までに集めた金がある。・・・・2階にお前の寝室兼部屋がある・・・・・・・・

九十九結樹」

桃「伯父さん、此処まで私のことを」

彼女は静かに泣いた。涙で書いてある文字が滲んだ。

数分後泣き止んだ彼女は2階へ上がって行った

寝室には木製の机と桃色のセミダブルのベッドがあり、桃色のカーペットが敷いてあって、服が入った

引き出しが5つの黒い箆笥が窓の隣に置いてあった。そしてベッドの上にたたんでいない制服が置いてあった。

上着は紺色でスカートはベージュのプリーツスカートで赤いリボンが首元に付いてあった。ボタンは金色で桜の花が彫ってあった。

桃「ふああ、もう寝よう」

彼女は制服を近くにあったハンガーに掛け、ベッドに入った。

桃「（枕までちゃんとサイズを合わせてくれたの）」

そして彼女は数分で眠りに落ちた。

第3話

俺は天野一輝^{あまのかずき}、高校生2年で17歳白い髪が特徴だった。俺は不思議な点が沢山あった。

一つは血液型がこれまでにない珍しい型で、背中の肩甲骨辺りには小さな羽の形をした痣があったが中学生の時、手術で消してもらった。そして他人のオーラが見えるのだった。

学校、彼の教室

俺のクラスは30人で担任が数学教師の山元という黒い眼鏡を掛けた女性教師だった。そして今はホームルーム中だった。

山「転校生を紹介する、入って来て九十九さん」

そしてドアが開き、桃色の髪的美少女が入って来た。オーラは赤黒くとても禍々しかった。なんだコレこいつ人間か？

桃「九十九桃香です、これからよろしくお願いします（窓際の人本当に人間？）」

女子「ボソ（凄く綺麗だね）」

女子2「（お姫様みたい）」

俺の後ろの二人の女子生徒が話していた。そして俺の隣の平野が聞いて来た。

平「おい、あいつ何色だ」

「今まで見たこと無い色だ」

平「どんな色」

「赤黒かった、本当に人間か」

平「何だよそれ珍しいな」

山「ちよつと皆静かに」

桃「席は何処ですか」

山「窓際の一番後ろにある」

丁度俺の後ろだった。遠くの席の男子生徒の目線が怖かった。

男子「（ケツあいつの後ろか）」

数時間後、昼休み

「頂きます」

俺は遊び仲間の平野と岸田で食っていた。弁当箱はアルミ製で中はご飯と串カツとブロッコリーとベーコンを巻いたアスパラガスとグラタンだった。彼女は桃色の弁当箱にカツサンド2個とポテトサラダとイナゴの佃煮だった。

「（な、何じゃこりゃあああ）」

平「（弁当にイナゴの佃煮?）」

岸「（あり得ない）」

桃「?（やっぱりイナゴの佃煮はまずかったわ）」

午後の授業が終わり、放課後

部活は入っていなかったので2人と帰った。

「部活無いっていいな」

その後二つに分かれた道で別れた。俺は右で2人は左の道へ行った。

「九十九?」

振り向くと彼女が居た。

そして俺の家の右隣の家に入って行った。俺の隣?

「ただいま」

家に入ってそう言った、俺の家は共働きだったので返事は無い。そして階段を上がり2階の自分の部屋に入った。中はドアの右の方に本棚があつて、その隣に箆笥（引き出しは3つ）があつた。

そして奥に黒いベッドがある。机は窓の前だった。そして彼女の2階の部屋の中が見えた。

「（やべえ着替えてる）」

彼女は上半身が桃色のキャミソールだけだった。俺はすぐ目を逸らし白いカーペットが敷いてある床に伏せた。

その後、夕食は母の作り置き豚の生姜焼きと白米を電子レンジで温め、鍋に入っている味噌汁をコンロで温めた物だった。

「（淋しい食卓だ）」

昔は母と父が居たのにな。

第4話

早朝

？

桃香の弟は、部下に彼女を捕まえるよう命じた。

彼は椅子に脚を組んで座り、近くに立つ一人の部下の赤い髪の若い男性に訊いた。彼は金髪で目は黒かった。

翔「あの魔法陣は」

部下「復元中です、しかし位置にすこし誤差が出ると思います」

翔「いつできる？」

部下「あと数分です」

翔「修復が終わったらすぐ行け」

部下「御意」

その日の午後12時、人間界

一輝視点

「何じゃこりゃあ」

背中が痒いと思い、姿見の前に立つと俺の背中に2対の白い羽根が生えていた、長さは俺の脚の長さぐらいだった。

「飛んでみるか」

そして窓を開き、机に乗り窓から身を乗り出した。

「（飛べえええ）」

そして翼が開き体が浮いた、見られるとヤバいので上空高く飛んだ。翼は羽ばたいていなかった。

「風が寒い」

今は2月だった。その後家に帰った。羽どうしよう。

「消えるのか」

羽の消し方が分からない俺は試しに視点切り替え

桃香の家

彼女は偶然それを見た。

桃「あれは私の前の席の天野？（天使？明日聞いてみよう）」

翌日

昼休みに九十九が話しかけて来た、周りの男子の視線が痛かった。

桃「ちよつと、来てくれる」

そして俺の後ろの襟を掴み凄い力で引きずった。

「ギャアアア」

そして、旧校舎の一階の廊下

桃「昨日の羽は何？」

俺は壁側が背中と向き合うように立たされた。

「は？」

見られてたのか

「何をいつてるんだかさつぱ」桃「とぼけても無駄よ」

彼女が目の笑っていない笑顔でそう言った。寒気がした。

「よ、よく分からない気付くと勝手に羽が生えてた」

桃「それと私は人間じゃないの」

「は？」

そして彼女の腰から矢印見たいな形の尻尾が生えた。

「悪魔!？」

威圧感が凄く伝わって来た。

桃「このことは2人だけの秘密です、貴方も羽のことは決して言うてはいけませんよ」

そして彼女は尻尾を消して、帰って行った。

帰りに平野に尋問された。岸本は熱で早退だったので彼だけだった。

平「で何の話だ」

「少なくとも告白ではない」

平「じゃあ何だ」

「「秘密にしろ」って言うてた」

そして分かれ道が近づいて来た。

平「じゃあな（聞きたいことはまだあるけどな）」

「じゃあまた来週」

その後、彼女が前から走って来た。頭からは血を流していた。

桃「（追手が来るなんて）」

しかし手を当てると血が消えた。

「大丈夫ですか」

桃「これぐらい平気よ、早くしないとあいつ等が」

男「見つけたぞ、その人間そいつを渡せ」

そして銃を持った黒いスーツを着た5人の男が走って来た。

男「逃がすか」

彼は逃げようとする彼女の背中を打った。

桃「うつ」

彼女は倒れて眠りだした。

男「麻酔弾だ、少し寝てて貰う」

「何なんだお前らはいっ背中が」

その時彼の背中が痛くなった。そして翼が生えた今度は3対で頭には光の輪が現れ、手には刀身が金色で波打った形状の剣が握られていた。長さは120センチだった。

男「て、天使だと羽が6枚」

一輝？「やつとこの姿に戻ったか（思い出してきた俺は——）」

彼は封印され、人間に転生させられた天使であつた。そして、昔消した痣は封印の焼き印だつた。

男「撃てええ」

一輝？「無駄だ」

しかし弾が消えた。

「「ありとあらゆるものを否定する程度の能力」俺の特殊能力だ、さっきのは銃弾の存在を否定した」

彼は能力を持っていた。

一輝？「かかって来い、小僧共」

彼はそう挑発した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4725ba/>

桃色の悪魔

2012年1月14日18時48分発行